

平成29年度 全国学力・学習状況調査から見える王寺町の児童生徒

はじめに

王寺町の児童生徒の学力・学習状況における教育課題を学校・家庭・地域とともに把握し、学校・家庭・地域のより一層の連携のもとにその課題克服に向けて取り組むため、調査の分析結果を公表します。

1 調査の概要

○調査の目的

- ・児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、改善を図る。
- ・本調査の結果を児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・このような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

○調査実施日 平成29年4月18日(火)

○調査対象 王寺町立小学校のすべての6年生、王寺町立中学校のすべての3年生

○調査内容 A:主として「知識」に関する問題 B:主として「活用」に関する問題

①教科に関する調査 小学校【国語A、国語B、算数A、算数B】

中学校【国語A、国語B、数学A、数学B】

※全国学力・学習状況調査は平成19年度から開始され今回で11年目の実施となりました。過度な序列化を防ぐため、平成29年度から、自治体別の平均正答率は、小数点以下を四捨五入し、整数値で示されるようになりました。また、政令市ごとの平均正答率が初めて公表されるようになりました。平成22年度と24年度は全体の3割程度の抽出調査、平成23年度は、東日本大震災の影響等で全国的な実施は取り止めとなったため、全児童生徒が対象となった悉皆(しっかい)調査は今回で8回目となります。

②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

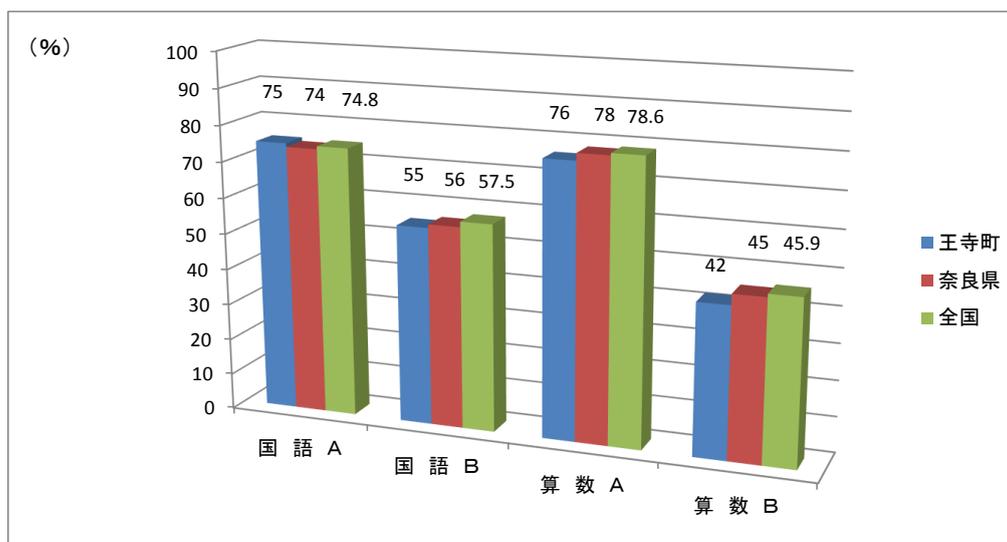
2 調査結果の概要

(1) 教科の平均正答率に関する調査結果

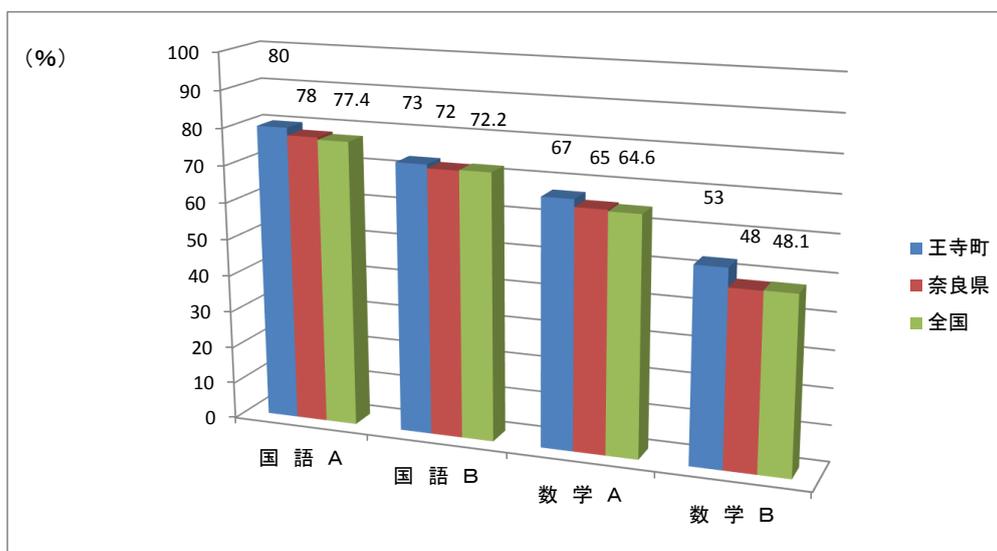
調査結果を学校種別・教科別に王寺町・奈良県・全国の平均正答率を比較しました。

【町立小・中学校の児童・生徒の調査結果をまとめました。調査結果は学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面になります。】

小学校:国語A、国語B、算数A、算数Bの平均正答率



中学校：国語A、国語B、数学A、数学Bの平均正答率



<全国的な傾向>

- ◇ 都道府県別の公立校の標準化得点(年度ごとの全国平均正答数を100と換算し、標準化した得点)の都道府県の上位層と下位層の平均正答数の差を比較すると、中学校数学Bでは、平成20年度に6ポイントあったが、平成29年度は4ポイントになり、小学校国語Aでは、平成25年度に5ポイント以上あった差が3.7ポイントに縮まり、全体的に差が縮まる傾向が見られ、下位自治体の底上げ傾向が続いています。
- ◇ 基礎問題の正答率が7割前後だったのに対し、応用問題では算数(数学)B問題で4割台にとどまりました。数学Bの記述式の問題に至っては、5問中4問が1割台でした。
- ◇ 思考力や表現力を問う応用問題の不振は、テスト開始当初から続いていて、資料から必要な情報を読み取り、前後のやり取りを捉え、相手の発言の意図を理解する。実社会で必要とされる能力をいかに育てるかが課題となっています。
- ◇ 小学校国語Aでは、実生活と結びつけながら、文脈に合った言葉を選ぶ力を調べる問題の正答率はおおむね高くなりました。国語Bでは、文章から必要な情報を読み取り、整理して書く問題の正答率が低くなっています。小学校算数Aでは、基本的なかけ算の立式は相当数の児童ができており、資料を二つの観点から分類・整理して特徴をつかむ「二次元表」の理解は不十分でした。算数Bでは、例年と同様に割合の問題の正答率が低い結果になりました。
- ◇ 小学校国語では、ことわざの意味や、漢字の読みについては、相当数の児童ができています。目的や意図に応じて、場に応じた適切な言葉遣いで話したり、必要な事柄を整理して書いたりすることに課題があります。また、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめることに課題があります。
- ◇ 小学校算数では、二つの数量の関係や、小数の乗法の計算における乗法の性質の理解については、相当数の児童ができています。「二次元表」の理解や、基準量・比較量・割合の関係を的確に捉え、判断理由を数学的に表現することに課題があります。
- ◇ 中学校国語Aでは、実生活に即した題材を扱った問題で、場面や状況に応じて言葉を適切に使う力に課題がみられました。国語Bでは、友達の意見をふまえ、相手にわかりやすく伝えることが苦手な傾向がみられました。数学Aでは、正の数・負の数の理解や簡単な立式などの問題の正答率は高く、「錯角」、1次関数の「変化の割合」、統計で使う「範囲」といった数学用語の理解や関数の意味の理解が不足している傾向がみられました。
- ◇ 中学校国語では、漢字の読みや、目的に応じて資料を効果的に活用して話すことについては、相当数の生徒ができています。事象や行為などを表す多様な語句についての理解に課題があり、伝えたい事実や事柄について、根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味する点に、依然として課題があります。
- ◇ 中学校数学では、ある数量を正の数と負の数で表すことの意味、簡単な一元一次方程式を解くことは、相当数の生徒ができています。扇形の弧の長さを求めること、関数の意味や範囲の意味の理解、各種事象を数学的に説明することに課題があります。
- ◇ 今回は、20政令市別の平均正答率が初めて公表されましたが、同じ都道府県内の他地域と比べて高いケースが目立ち、大都市部では全体的に成績が高い児童生徒の割合が多い傾向がみられます。

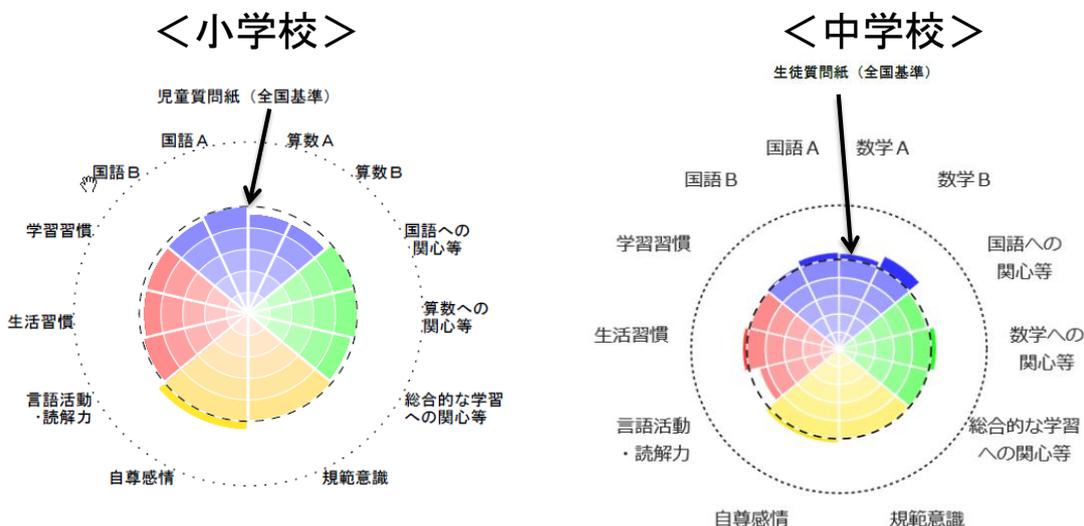
<王寺町と全国・奈良県との比較>

今回は残念ながら、小学校の国語B、算数A・Bにおいて、奈良県及び全国の平均正答率をやや下回りました。

(過去においては、全ての学力調査結果におきまして、王寺町は、全教科とも奈良県及び全国平均を上回っていました。)

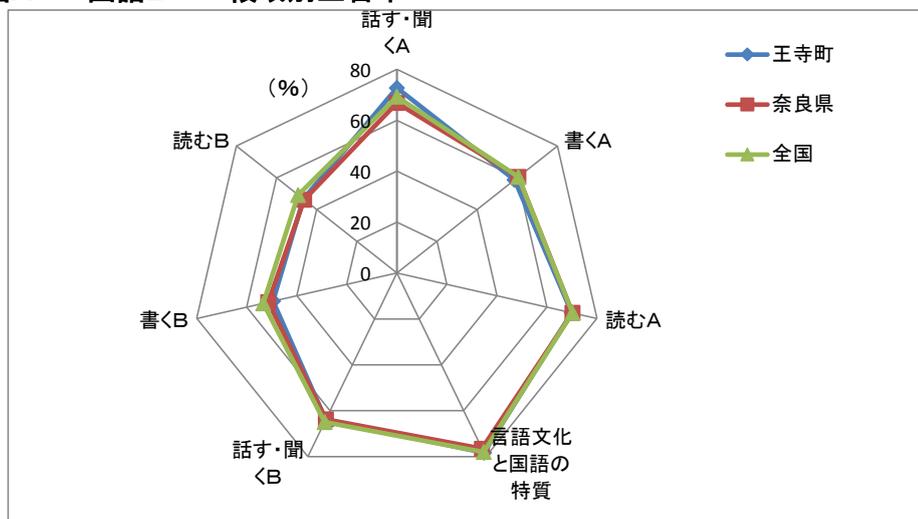
(2) 学力・学習状況調査結果の概要

王寺町の児童生徒の国語、算数・数学、教科への関心、規範意識、自尊感情、生活習慣、学習習慣等を全国基準と比較したのが下のチャートです。昨年度までと違った結果として、今回は、小学校の国語Bと算数A・B、生活習慣、学習習慣が、全国基準よりやや低位となりました。中学校での言語活動・読解力が低位となりました。いずれの項目も高位になるよう、学校、家庭、地域が協力しながら、継続的な取組が必要です。



(3) 学力に関する領域別調査結果

小学校 国語A・国語B 領域別正答率



<国語A・B共通>

今回の調査では、今までと違った傾向を示した。A問題の「話す・聞く」の領域別正答率のみ全国・奈良県よりも若干良好であったが、他の領域では同等か若干下回っていた。A問題の無回答率は若干低く抑えられている。

<国語A>

「学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく読み書きすることができるか」の設問の正答率は、全国・奈良県より良くなっている。

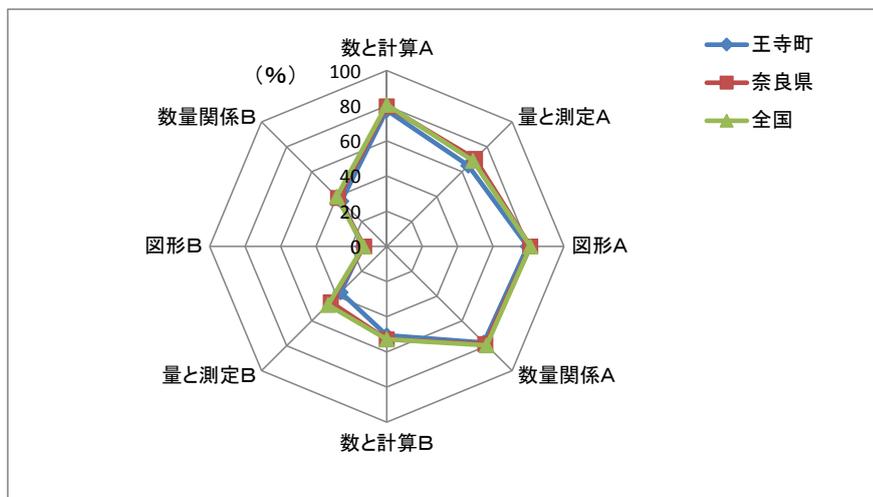
「手紙の後付けに必要な、日付・署名・宛名のそれぞれの位置について、適切なものを選択する」問題、「参加たいしょう(対象)と正しい漢字を書く」問題では、全国・奈良県・王寺町の正答率は、いずれも50%未満であった。

<国語B>

「目的や意図に応じ、適切な言葉遣いで話せるか」、「話の構成を工夫するためにスピーチメモのよさを捉えられるか」、「目的や意図に応じて、文章全体の構成を考えられるか」、「登場人物の相関関係や心情、場面描写を捉えられるか」を問う設問の正答率が全国・奈良県を比較して若干良くなっている。

「場に応じた適切な言葉遣いで自分の考えを話せるか」、「目的や意図に応じ、必要な内容を整理して書けるか」、「自分の考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉えられるか」を問う設問の正答率が全国・奈良県を比較して低くなっている。

小学校 算数A・算数B 領域別正答率



<算数A・B共通>

今回の調査では、今までと違った傾向を示した。4つの領域別正答率は全国・奈良県よりも若干下回っていた。B問題の無回答率は低く抑えられている。

<算数A>

「5÷9の商を分数で表せるか」、「立方体の面と面の位置関係を理解しているか」を問う設問の正答率が全国・奈良県と比較して良くなっている。

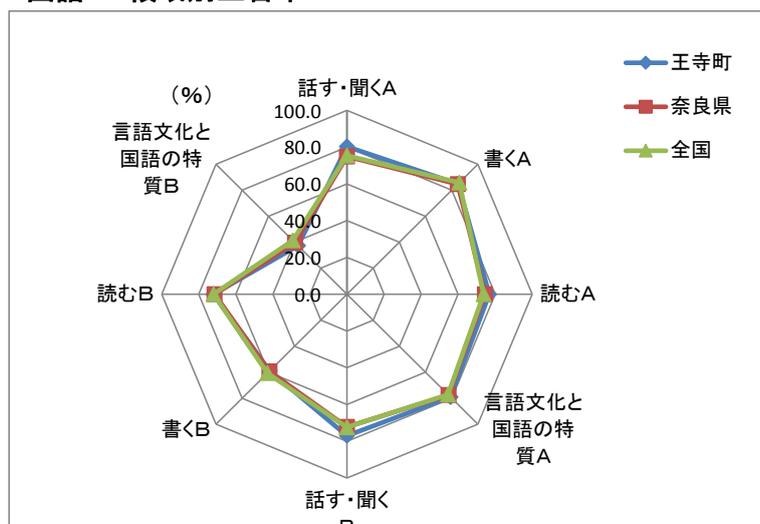
「小数の数量関係を数直線に表すことができるか」、「小数と整数の加法ができるか」、「加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすることができるか」、「高さが等しい平行四辺形を三角形について、底辺と面積の関係を理解しているか」、「正五角形は、五つの合同な二等辺三角形で構成できることを理解しているか」を問う設問の正答率が全国・奈良県と比較して低くなっている。

<算数B>

「直線の数とその間の数の関係に着目して、示された方法を問題場面に適用することができるか」、「仮平均の考え方をを用い、測定値の平均を求めることができるか」、「身近なものに置き換えた基準値と割合を基に、比較量を判断し、その判断の理由を記述できるか」を問う設問の正答率は、全国・奈良県と同様に随分低くなっており、課題がある。

「示された条件を基に、適切な式を立てることができるか」、「示された条件を解釈し、その関係性を図に表現することができるか」、「飛び離れた数値を除いた場合の平均を求める式を判断することができるか」を問う設問の正答率は、全国・奈良県と比較して低くなっている。

中学校 国語A・国語B 領域別正答率



<国語A・B共通>

各領域別の正答率は、A問題では全体的に全国・奈良県よりも概ね良好であるが、B問題ではやや下回っている。

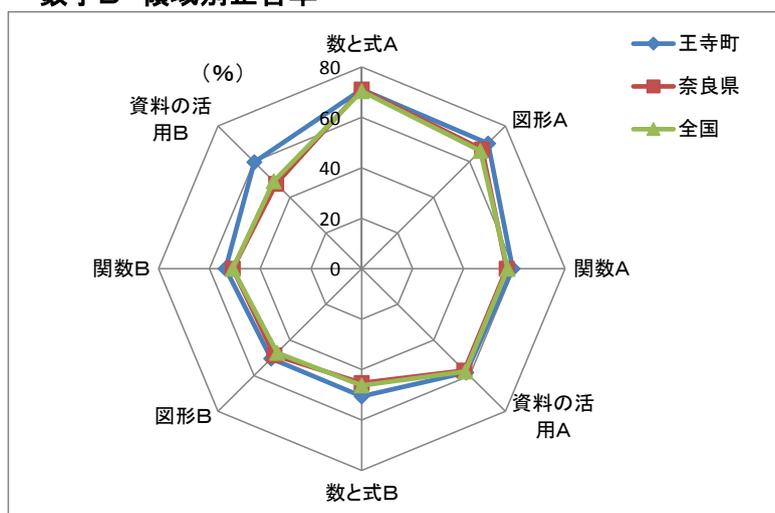
<国語A>

「目的に応じて資料を効果的に活用して話すことができるか」、「相手に分かりやすいように語句を選択して話すことができるか」、「文章に表れているものの見方や考え方について、交流を通して自分の考えを広げることができるか」、「文脈に即して漢字を正しく読み書きできるか」、「楷書と行書との違いを理解しているか」、「古文と現代語訳との対応・古典には様々な種類について知っているか」を問う設問の正答率が全国・奈良県よりも随分良くなっているが、「文章の構成を工夫して分かりやすく書けるか」を問う設問の正答率が下回っている。また、「事象や行為などを表す多様な語句について理解しているか」を問う設問の正答率は、全国・奈良県・王寺町とも40%未満であった。

<国語B>

「登場人物の言動の意味を考え、内容を理解しているか」、「目的に応じて資料を効果的に活用して話すことができるか」、「話の倫理的な構成や展開などに注意して聞くことができるか」、「相手の反応を踏まえながら、事実や事柄が相手に分かりやすく伝わるように工夫して話すことができるか」を問う設問正答率が全国・奈良県よりもやや良くなっているが、「表現の仕方について捉え、自分の考えを書くことができるか」、「集めた材料を整理して文章を構成することができるか」、「必要な情報を集めるための見直しをもつことができるか」を問う設問の正答率が全国・奈良県よりもやや下回っている。

中学校 数学A・数学B 領域別正答率



<数学A・B共通>

各領域別の正答率は全体的に全国・奈良県よりも良好で、無回答率は低く抑えられている。

<数学A>

「2つの負の数の四則計算を理解しているか」、「数量の関係を一元一次方程式で表すことができるか」、「回転体と平面図形の関係性を理解しているか」、「立方体の見取図を読み取ることができるか」、「作図の手順を読み、平行四辺形の条件を理解しているか」、「与えられた命題の仮定を読み取ることができるか」、「比例・反比例・一次関数のグラフについて理解しているか」、「簡単な確率の問題を理解しているか」を問う設問正答率が全国・奈良県よりも大幅に良くなっている。

「扇形の弧の長さを求めることができるか」、「関数の意味を理解しているか」、「範囲の意味を理解しているか」を問う設問の正答率は、全国・奈良県・王寺町とも40%未満であった。

<数学B>

「図形の移動に着目して、対称性を捉えることができるか」、「事象を数学的に表現すること・数学的な表現を的確に処理することができるか」、「グラフから必要な情報を適切に読み取ることができるか」、「筋道を立てて説明することができるか」、「必要な情報を適切に読み取り、数学的に説明することができるか」を問う設問の正答率が全国・奈良県よりも良くなっている。無回答率も全国・奈良県より比較的低くなっている。

「回転移動の説明ができるか」、「事象と式の対応・事象の成り立ちや資料の傾向を数学的に説明できるか」を問う設問の正答率は、全国・奈良県・王寺町とも40%未満であった。

3 児童・生徒質問紙調査の経年変化(抜粋)

町立小・中学校の児童生徒に学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査が実施されました。平成25年度～29年度の経年変化について整理し、その中から特徴的な項目を抜粋しました。

①【朝食を毎日食べていますか】

小学校では、ほぼ毎日朝食を食べている児童の割合が前年度よりもやや下がったものの、その割合は約95%の平均値で安定しています。一方、中学校では、ほぼ毎日朝食を食べている生徒の割合が減少傾向にあったものの、約90%の平均値に回復しました。

②【自分には、よいところがあると思いますか】

「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童と生徒の割合は年々増えてきています。(平成29年度: 肯定的な回答割合 児童84%、生徒76% 全国平均値よりも5~6ポイント良好)

③【普段、1日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見ますか】

児童生徒が1日当たりのテレビ等を見ている時間は、1時間以上2時間未満の割合が最も多く、5年間平均で児童約26%、生徒約27%ですが、2時間以上テレビ等を見ている割合を合計すると、5年間平均で児童約45%、生徒約51%もあり、対して、全く見ないのは児童・生徒とも約3%でした。

④【普段、(パソコン・携帯ゲーム機・スマートフォンなどの)テレビゲームを1日当たり何時間しますか】

児童生徒とも1日当たりのテレビゲームをしている時間の5年間平均値は、1時間未満が児童で約31%、生徒で約30%あり最も多い割合となりました。一方、全くしないのは児童が約16%で、生徒は約23%でした。

⑤【家で学校の宿題をしていますか】

家で学校の宿題をしている児童の割合の経年変化は、年々高くなり、平成28年度に95%に達しました。生徒の割合も徐々に高くなり、前年度までの宿題をしている生徒の割合は平均60%弱から、平成29年度は75%になりました。児童・生徒とも、全国平均値よりも5ポイント程度高い値になりました。

⑥【今住んでいる地域の行事に参加していますか】

「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした生徒の割合が年々増えていきます。児童の割合は前年度と同程度ですが、肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、毎年、全国・奈良県平均よりも10ポイント程度高い割合になっています。

(平成29年度:「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合 児童74%、生徒53%)

⑦【地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか】

「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童・生徒の割合は増えました。

(平成29年度:「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合 児童68%、生徒61%)

⑧【地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか】 ※28年度から実施された調査

平成29年度にボランティア活動に参加した児童の割合は57%、生徒の割合は71%となっており、児童・生徒とも全国平均値よりも21ポイント程度高い割合になっている。

⑨【新聞を読んでいますか】

「ほぼ毎日読んでいる」と回答した割合の5年間平均は、児童約12%、生徒約7%に対して、「ほとんど、または、全く読まない」と回答した割合は、児童約54%、生徒約57%もあり、なお課題があると考えられます。

平成29年度の調査において、「週に1~3回程度読んでいる」と回答した割合は、児童18.6%、生徒22.7%になり、全国平均値より、児童は5ポイント、生徒は13ポイント高くなりました。平成28年度から学校の各教室(小学校は5・6年生の教室)と学校図書館に新聞を配置し、各学校がNIE(Newspaper In Education=学校で新聞を教材として活用する)教育に力を入れていただいていることが、効果をもたらしたと考えられます。

※新聞を定期購読している家庭が減ってきていることが、新聞を読んでいる割合が伸びない背景にあるということも考えられます。

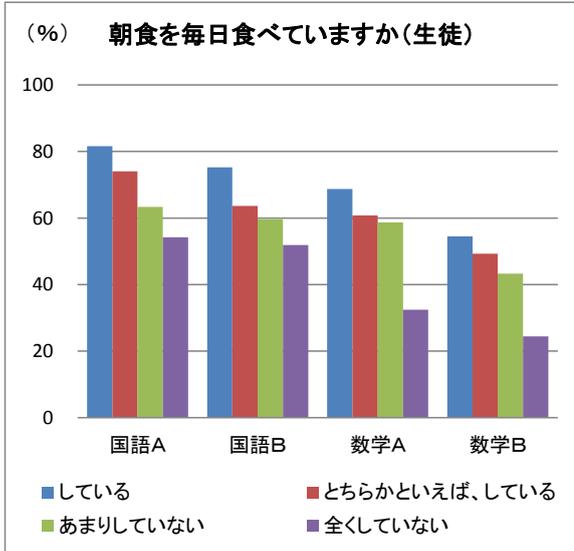
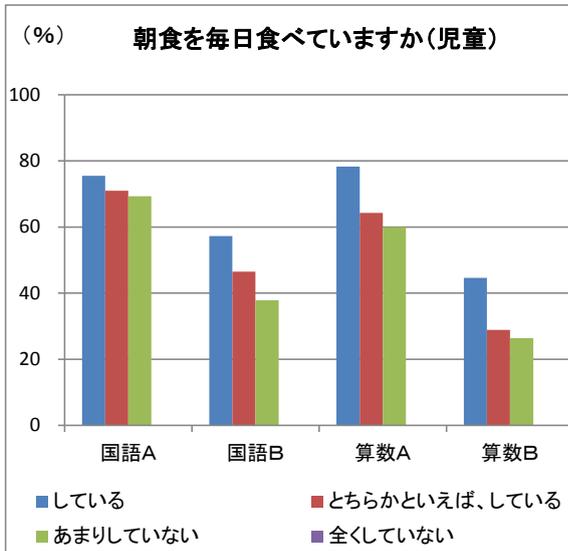
⑩【学校のきまりを守っていますか】

「当てはまる」と肯定的な回答をした児童の割合は不規則ながら増えてきましたが、肯定的な回答をした生徒の割合は順調に増えてきています。(平成29年度:「当てはまる」と回答した割合 児童39.3%、生徒68.8%)

4 家庭への提案

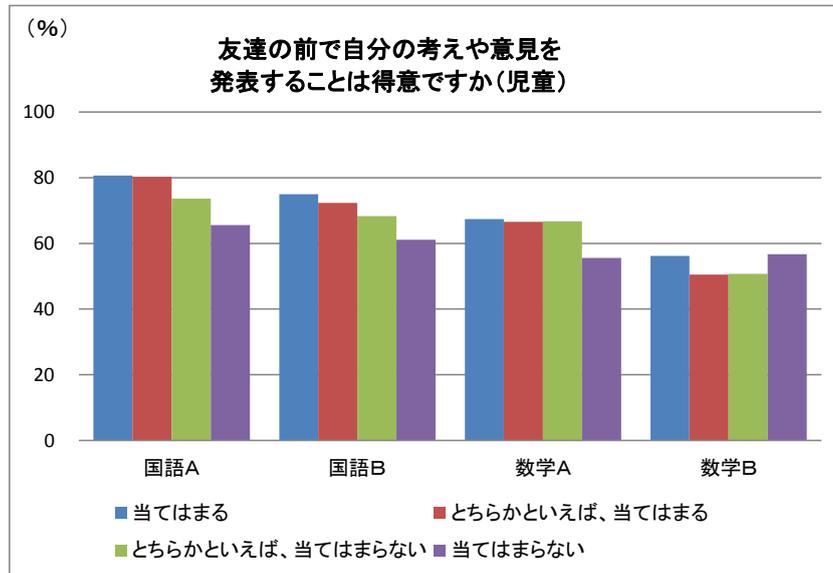
児童・生徒の学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査と国語A・B、算数(数学)A・Bの各教科正答率との間に相関関係が見られる項目がありますので、今後、お子様の家庭生活を見直す資料にさせていただきたいと思っております。

＜＜質問紙調査と各教科正答率との間に見られる特徴的な相関関係＞＞



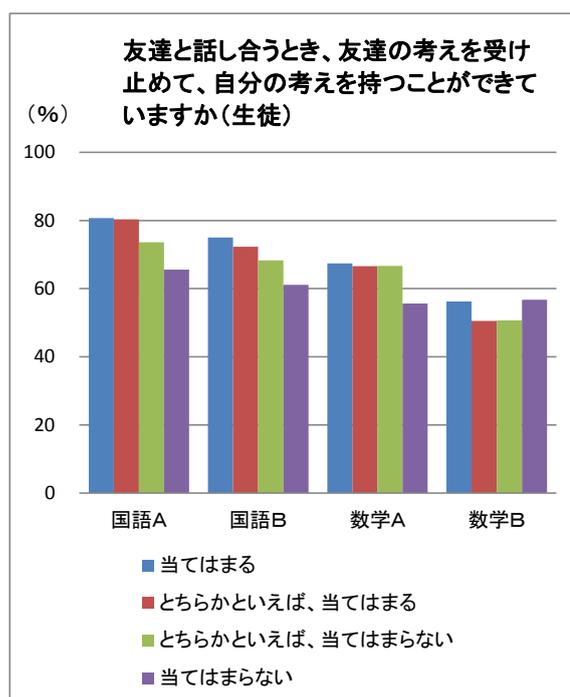
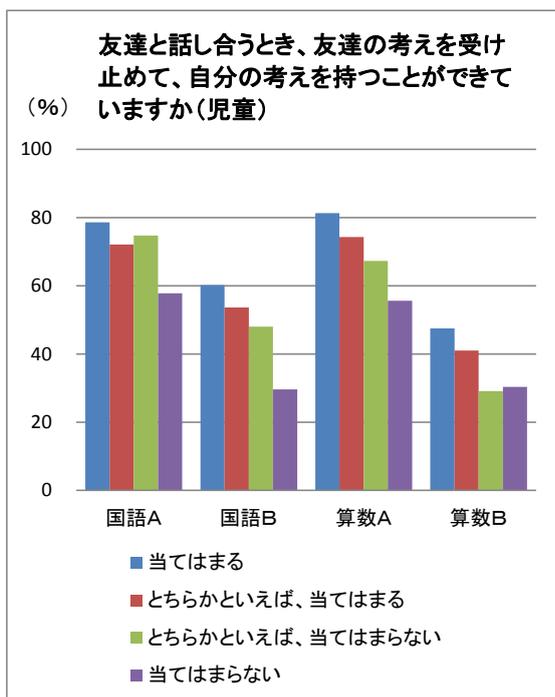
※朝食を全く食べていない児童はいませんでした。

朝食を毎日食べている児童・生徒は、正答率が高い傾向が見られます。

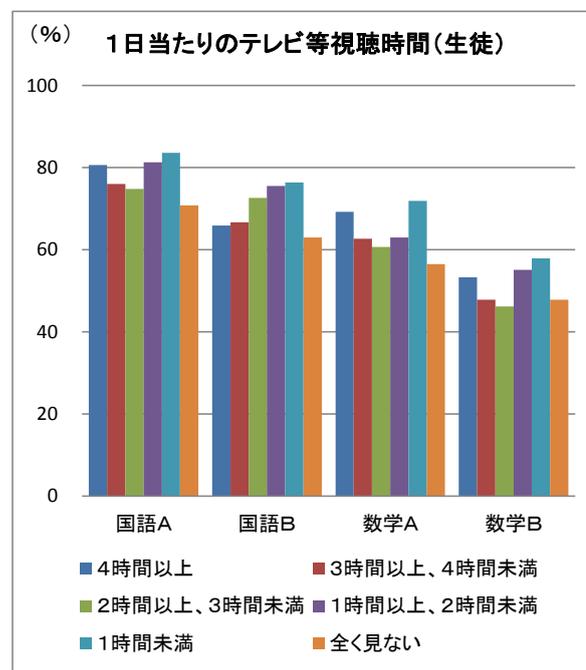
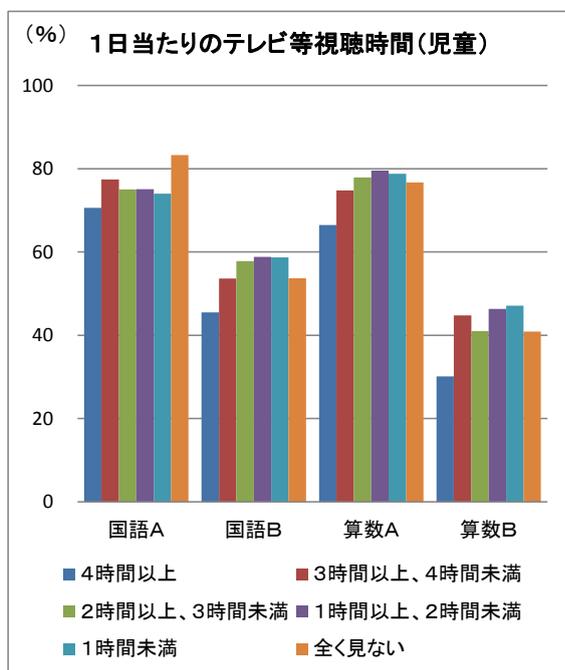


友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意な児童は、正答率が高い傾向が見られます。

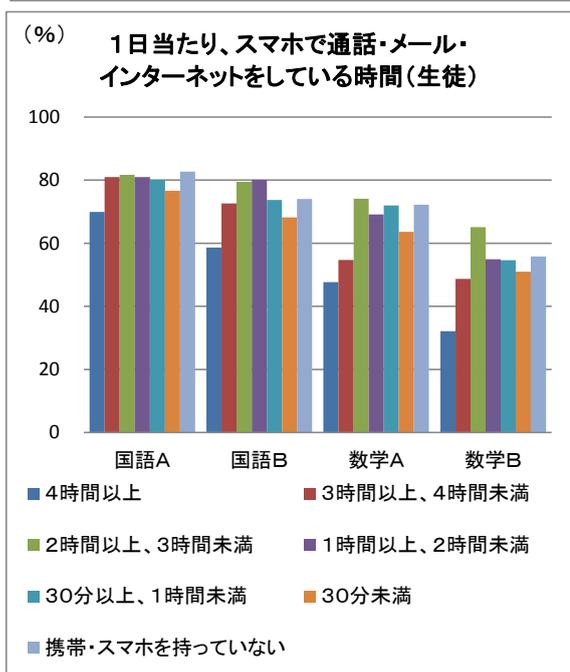
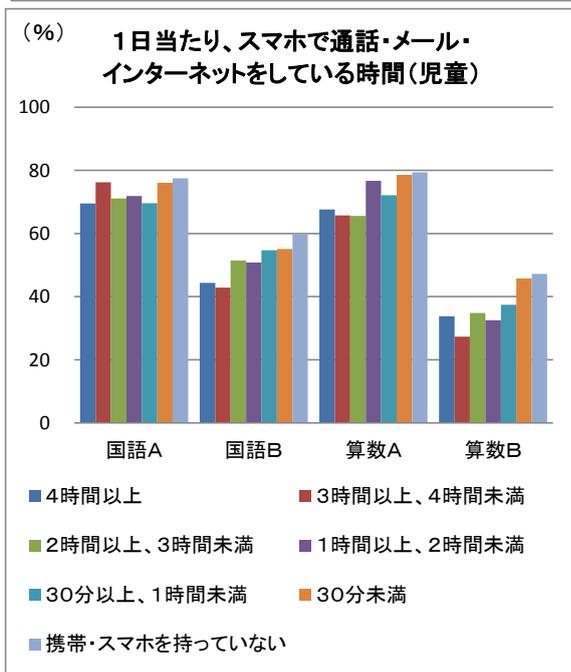
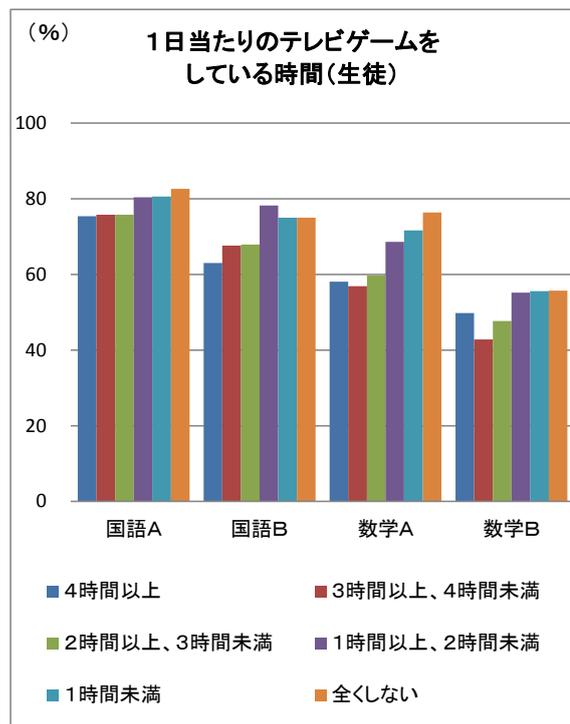
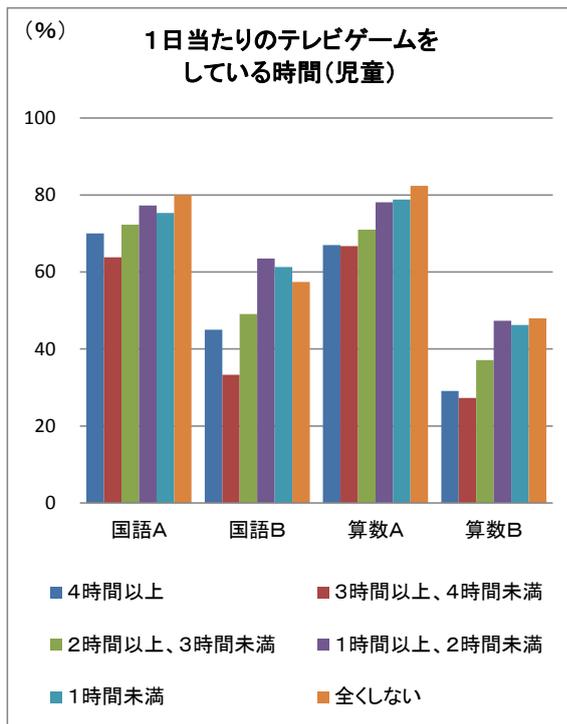
(注)生徒においては、同様の相関関係が見られませんでした。



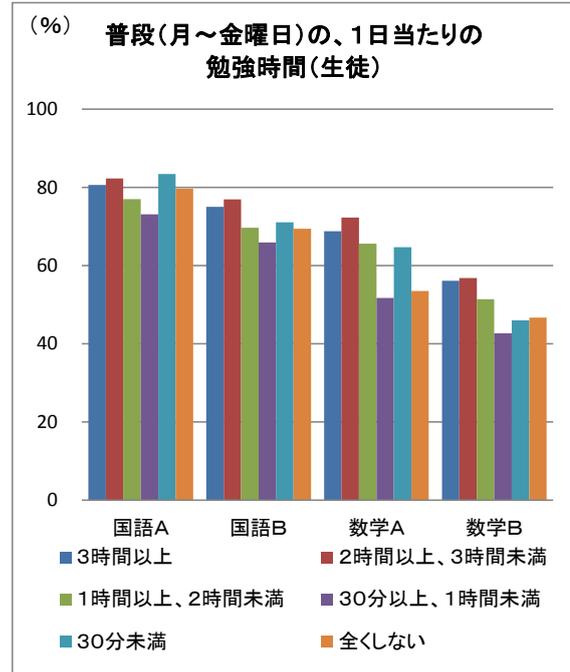
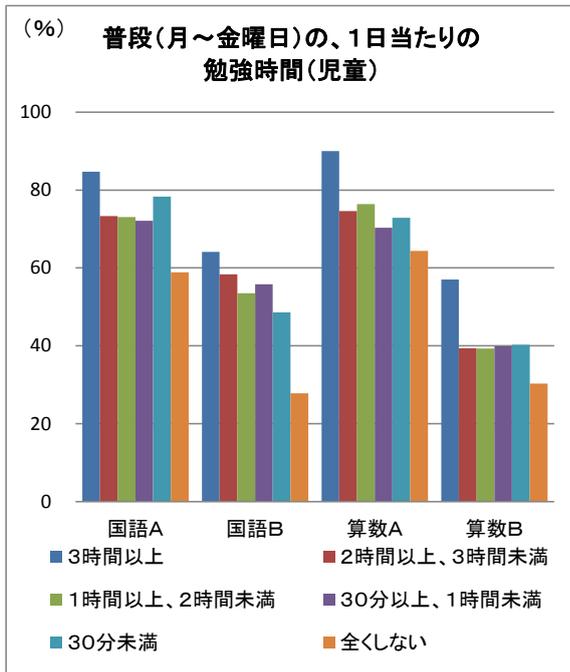
相手の発言の意図を捉えて聞き、自分の言いたいことを論理的にまとめて発言するという日常で必要とされるコミュニケーション力が大切であることが明らかとなっている。



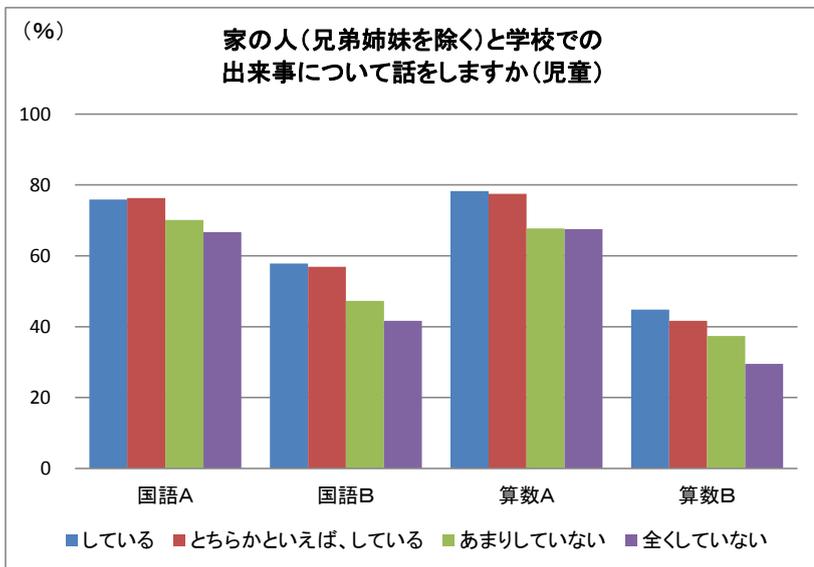
1日当たりのテレビ等の視聴時間が長時間になるほど、家庭学習の時間が圧迫され、正答率も振るわない結果となりました。(テレビを全く見ない児童・生徒の割合は、全体の3%程度でした。)



テレビ等の視聴時間と学力の相関関係と同じく、1日当たりのテレビゲームをしている時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットなどをしている時間が長くなるほど、正答率も振るわない結果となり、特に、3時間を超える児童生徒の正答率は極端に下がっています。

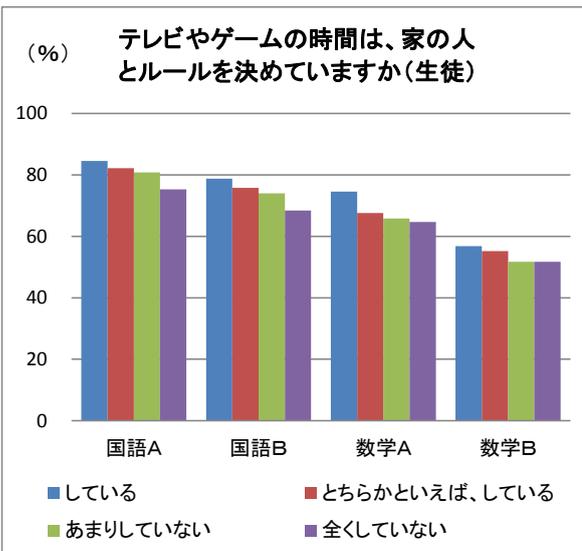
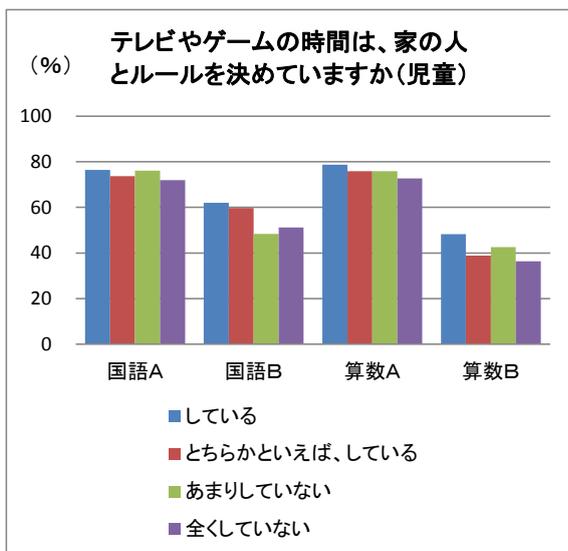


当然のことながら、普段(月～金曜日)の1日当たりの勉強時間と正答率は強い相関関係が見られます。家庭学習の習慣がしっかりと定着することで確かな学力が育成されることとなります。特に、算数A・B問題では、3時間以上勉強している児童の平均正答率が随分高くなっています。土日などの学校が休みの日の1日当たりの勉強時間と正答率との相関関係も同様の傾向が見られました。更に、「自分で計画を立てて勉強していますか。」の質問に肯定的な回答をした児童の正答率との相関関係も同様の傾向が見られました。家庭での計画的・効率的で自律した学習習慣を身に付けることが何よりも大切です。

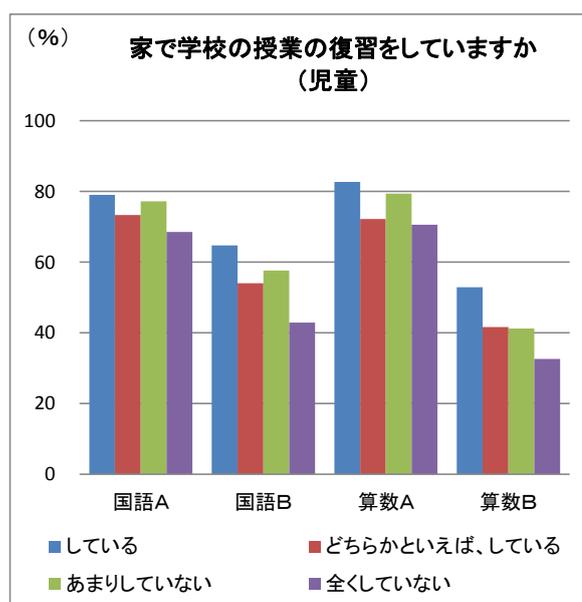
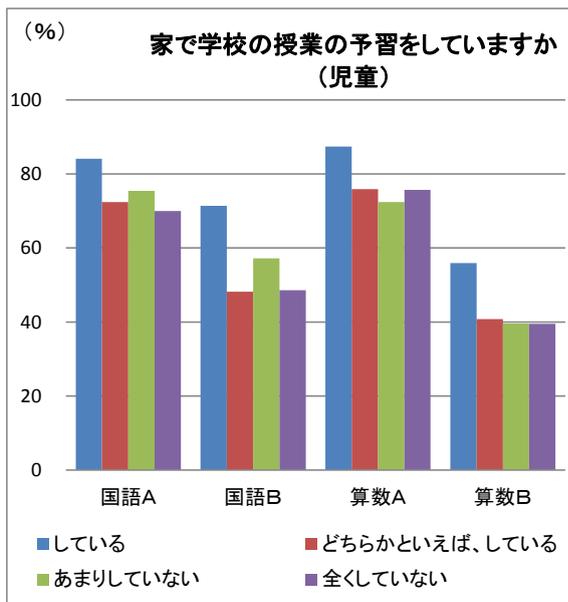


家の人と学校での出来事をよく話している児童の割合は過半数あり、家の方のアドバイス等に触発されて、学校生活における姿勢が前向きになるなどの要因が考えられ、正答率が高い傾向が見られます。

(注) 生徒においては、同様の相関関係が見られませんでした。



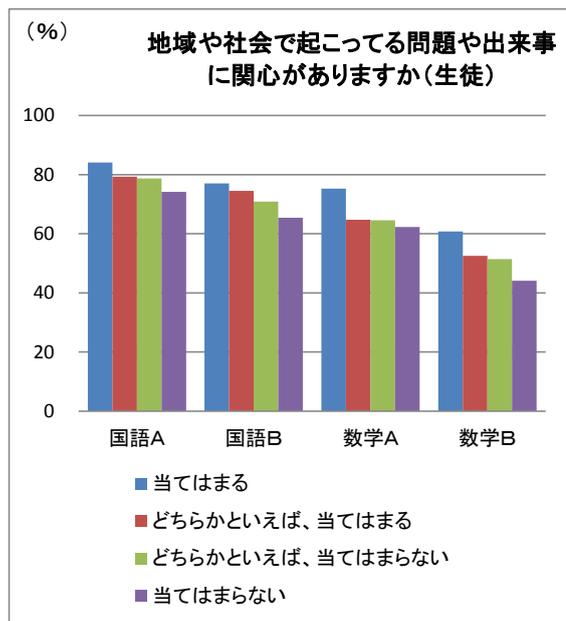
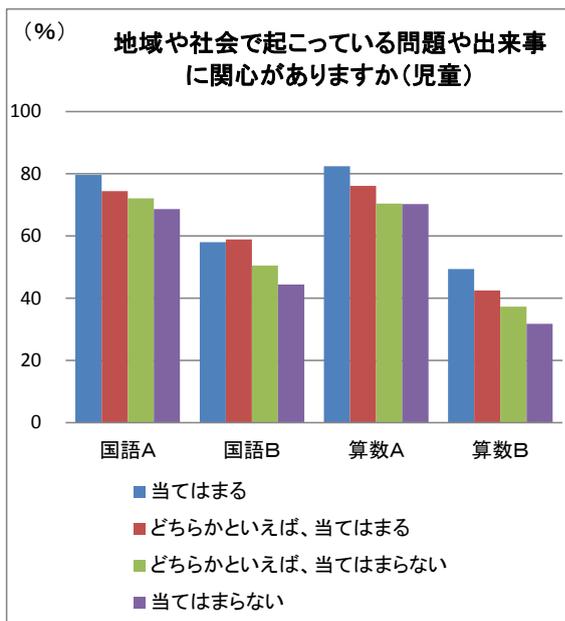
テレビやゲームの時間を「決めている」+「どちらかといえば決めている」平成29年度の割合は、児童49.8%、生徒31.1%でした。家の人と相談して決めたルールを守り、テレビやゲームの時間と学習時間のメリハリをつけることで、規律正しい生活になり、正答率が高くなる傾向が見られます。



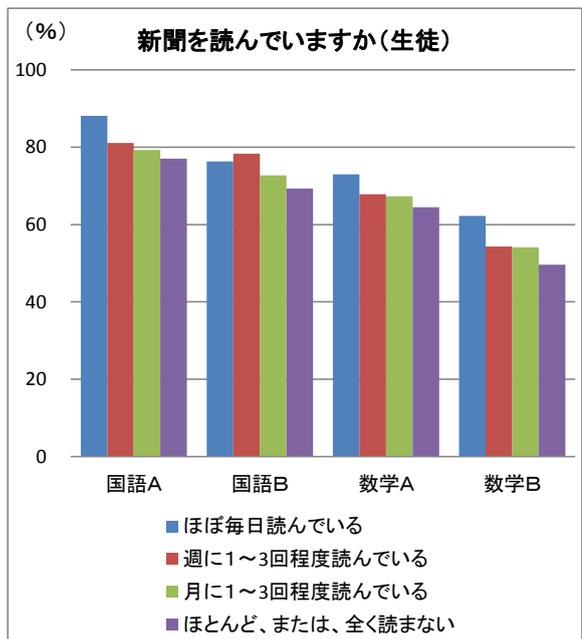
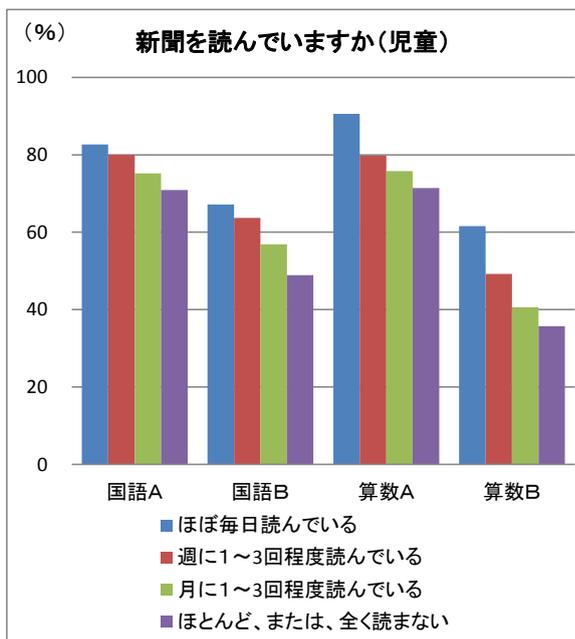
家庭で学校の授業の予習・復習をしている児童の学力は高い傾向があることがグラフからも明らかです。授業の予習をすることで授業内容の理解が深まり、予習した時に生じた疑問点に焦点を当てながら授業を受けることができます。また、復習をすることで学力が定着し、練習問題や発展問題に取り組むことで活用する力を付けることができます。

● (平成29年度:授業の予習を「している」+「どちらかといえば、している」と回答した割合 児童37%、生徒31%)
 (平成29年度:授業の復習を「している」+「どちらかといえば、している」と回答した割合 児童55%、生徒52%)

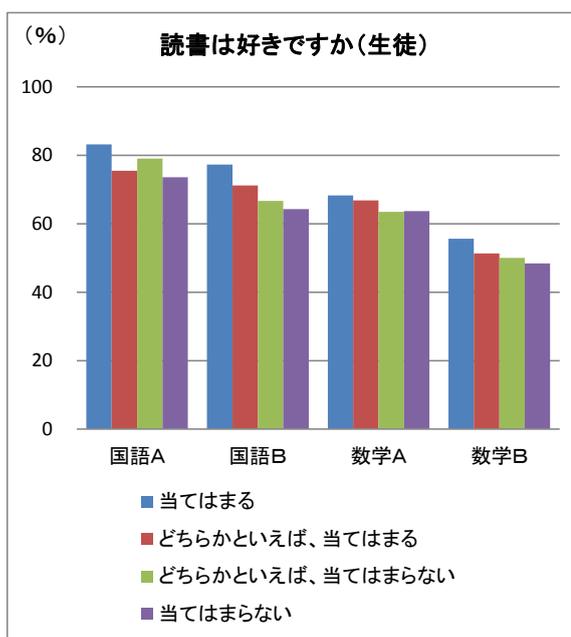
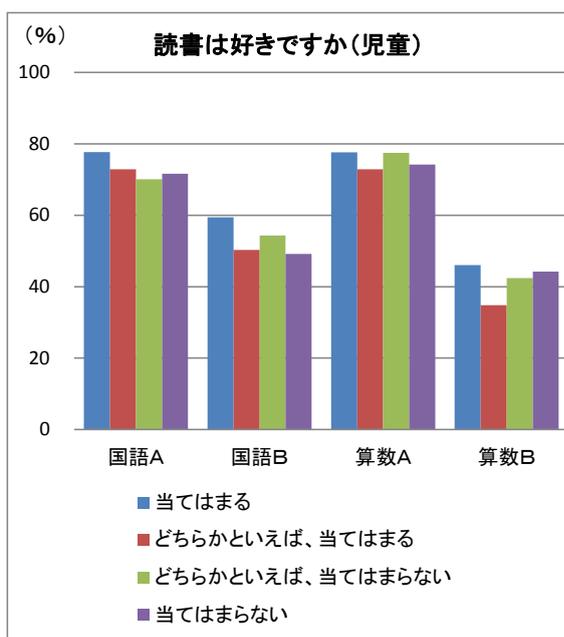
※学校の宿題以外の予習と復習について答えています。
 ※今回、生徒に関する相関関係は、児童と同じくらいの顕著な傾向は見られませんでした。



地域や社会で起こっている問題や出来事に関心をもっている児童生徒の方が、平均正答率は高くなっています。新聞やインターネット、SNSなどの様々なメディアを通じて社会の出来事に関心を持ち、地域行事などに参加して交流をもつことで、自分なりの意見をもつことが学力にも好影響をもたらしていると考えられます。
 (平成29年度:「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合 児童68%、生徒61%)



新聞を「ほぼ毎日読んでいる」+「週に1~3回程度読んでいる」割合は、児童30.6%、生徒31.6%でしたが、徐々に増えています。一方、「ほとんど、または、全く読まない」割合は、児童51.9%、生徒42%でした。新聞を読んでいる頻度と正答率には相関関係があり、児童においてより顕著に表れています。
 ※テレビのニュース番組やインターネットのニュースを見ている頻度と正答率にも同様の相関関係が見られます。



読書が好きな児童生徒の方が正答率は高くなっています。読書をすることにより知識量が増え、興味・関心をもつことで世界が広がります。自分の考えを表現する力の育成にも効果があります。
 (平成29年度:「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合 児童77.1%、生徒76.4%)
 ※児童・生徒とも割合は、昨年度よりも増加しています。

5 王寺町教育委員会の取組

子ども達の学習への関心・意欲・態度、学習習慣、生活習慣、自尊感情、規範意識等をより醸成するために、王寺町教育委員会と幼稚園・小学校・中学校が連携して様々な取組をしています。また、王寺町では学校教育分野だけでなく生涯教育分野も含め、次のような様々な施策を実施し、学校をはじめ、家庭、地域が目標を共有しながら連携して取り組んでいます。

○教職員研修の充実による教師力の向上

「分かりやすい授業」「やる気を引き出す授業」を構築するための授業研究、ICTの活用、「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の指導方法の研究など、教職員の指導力向上のための研修を奨励しています。

○教育施設・設備の整備

幼児・児童・生徒が安全・安心で快適に学校(園)生活を送ることができるように、学校(園)施設・設備を整備し、教育環境を充実させ、教育効果を向上させるよう努めています。

○「学校いきいきプラン」事業の実施

各小・中学校に教員資格を持つ町費講師を配置することで、児童生徒の学習レベルの向上、集団への適応能力の向上、特別支援教育、生徒指導に効果を上げています。(各幼稚園には特別支援教育に関わる講師を加配しています。)

○学校・家庭・地域の三者連携による教育力の向上

「地域に開かれた学校づくり」「地域の子どもを地域で見守る」「子ども達の発達段階に応じた形で社会参加・社会貢献する」という3つの視点を大切にし、教育支援活動及び放課後対策など、学校と地域が双方向に働きかける「地域と共にある学校づくり」に取り組んでいます。

○挨拶運動の推進

王寺町挙げての挨拶運動(「あいさつ+1(プラスわん)」運動)を実施し、日常的な挨拶を通して幼児・児童・生徒の規範意識だけでなく、社会性やコミュニケーション力を育てています。

○外部人材を活用した教育活動の実施

小学校において、奈良学園大学をはじめとする近隣の大学生による学校教育への支援を受け入れることで教育活動を充実させています。また、学生自身が教育現場で経験を積むことにより、今後の人材育成につなげることを目的として、授業支援学生ボランティア活動が実施されています。更に、各幼・小・中学校においても特色ある取組が実施されています。

○新聞を読むことと読書活動の推進

各小・中学校では新聞を定期購読しています。一般の新聞以外に小学生向け新聞と中学生新聞を購読して、教科指導や学級指導等に活用することによって視野を広げ、社会に関心を持たせるように取り組んでいます。また、豊かな感性や情操を育むため、各小中学校に配置した学校図書館司書を中心に読書活動の推進、蔵書管理システムの導入や図書の購入等により、学校図書館の充実を図っています。

○幼稚園、小学校、中学校の12年間を見通した外国語(英語)教育の実施

幼稚園での英語体験保育、小学校では教育課程特例校の指定を受けて低学年から外国語(英語)教育に力を入れています。幼稚園と小学校にネイティブスピーカーとして外国人講師を派遣し、幼稚園～小学校～中学校まで切れ目のない外国語(英語)教育に取り組んでいます。また、英語力を高めるため、中学3年生で実用英語技能検定(英検)3級程度以上の英語力を持つ生徒を育成するために、各中学校を英検受験の準会場としたり、受験対策講座を開催するなどして機運を高め、1年生からの英検受験を奨励しています。

○放課後学習支援事業として寺子屋塾(愛称:雪丸サポートスクール)の実施

小学4年生～中学3年生までを対象として、小学生は週3回各2時間ずつ、中学生は週2回各2時間ずつの寺子屋塾(雪丸サポートスクール)を実施しています。地域の経験豊富な人材を活用し、児童生徒一人一人の学習意欲の向上と学習習慣の定着及び学力の向上を目的に実施しています。

6 保護者・地域の皆様へ

- ☆「早寝、早起き、朝ごはん」が生活の基本となります。これからも規則正しい生活を続けましょう。
- ☆ 学校の授業で習ったことの復習と予習を中心に、発達段階に応じた自主的で計画的な家庭学習の習慣を身に付けましょう。
- ☆ 家族で地域行事やボランティア活動に参加したり、地域や社会での出来事について話し合う機会を持つなど、子どもの社会性を育成しましょう。
- ☆ 携帯電話・スマートフォン・テレビ・テレビゲームの節度ある使い方ができるように家庭内ルールを作りましょう。(フィルタリング機能の利用なども含む)
- ☆「褒めて伸ばす」「認めて伸ばす」ことで自己肯定感が育成され、自尊感情が醸成されます。
- ☆ 児童生徒の規範意識の向上には、学校・家庭・地域の連携が欠かすことのない大切な役割を果たします。規範意識の高い環境づくりに取り組みましょう。